

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Guided to the lakes : William Wordsworth and nineteenth-century literary tourism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yoshikawa, Saeko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1359">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1359</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



*Guided to the Lakes: William Wordsworth and Nineteenth-Century Literary Tourism*  
(『湖水地方へ ウィリアム・ワーズワスと 19 世紀文学観光』)

吉川 朗子

19 世紀の英国では、中産階級の余暇の楽しみのひとつとして観光が急速に発達したが、なかでも文筆家の家や墓、作品ゆかりの場所を訪ねる文学観光(literary tourism)は大きく発展した。ガイドブックは競うように文学作品を引用し、作家や作品ゆかりの場所を時に挿絵入りで紹介するなどして、文学観光の促進に寄与した。他方ガイドブックは彼らの作品を広く一般大衆に広める役割を果たし、作家たちの名声形成に寄与することになった。

本論文は、19 世紀英国湖水地方における「ワーズワス観光」という現象 文学観光の一形態 を考察対象とする。湖水地方観光はピクチャレスク旅行ブームとともに始まり、交通網の整備・鉄道の発展に伴い大衆旅行へと変容していくが、その旅行史と「湖水派」詩人ワーズワスの受容のされ方との相互関係を本格的に論じたものはこれまでなかった。ワーズワスと湖水地方旅行との関係は、これまで主に彼がピクチャレスク美学をどう受容し、どう凌駕したのかという観点、あるいは景観保護論的観点から論じられてきたが、そこでは詩人自身の価値観・自然観・詩学が問題となってきた。本論の焦点は、観光文化との関連におけるワーズワス受容の様相にある。

本論文では、これまでほとんど着目されることのなかった様々な一次資料 ガイドブック、地誌、旅行記事、紀行文、回想録、広告、アルバム、挿絵入り詩集などを幅広く渉猟した。これらの文献・視覚資料にワーズワスおよびゆかりの場所がどのように言及・表象されているか、どう咀嚼され、援用されているかを探り、これらの媒体を通してワーズワスがどのように一般読者に受容され、湖水地方の詩人としてシンボル化されていったのかを検証している。また詩や散文に示されたワーズワスの自然観、景観保護的思想を広めたのはガイドブックであったことも指摘した。ワーズワスの名声が観光文化を通していかにして形成され確立されたのか、他方、文化遺産としての湖水地方のアイデンティティ形成にとってワーズワスの存在がいかに影響したのかを探ることが、本論の目的である。詩や哲学という「高次な文化」と観光という「大衆文化」との交渉の有様、両者を繋いだガイドブックの媒体的役割について明らかにすることを目指した。

プロローグとして第 1 章「画家の目を通して アルバム『ワーズワス』」では、ヴィクトリア朝中期に作られた一冊のアルバムを検討した。これは 1850 年 8 月、ワーズワスの死後僅か 3 ヶ月半という早い時期に、詩人ゆかりの場所を巡礼した記録 100 以上の素描を集めた未出版の画集である。本格的な伝記もまだ出版されていないこの時期に、詩人の人生と作品にこれほど詳しい人物とは何者なのか。ワーズワス巡礼とも言うべき旅の形式は、どの程度当時の流行に沿っているのか。謎の画家の足跡を辿ることで、ヴィクトリア朝におけるワーズワス受容の一端を浮かび上がらせた。

第一部(ガイドブックのなかのワーズワス)では、第 1 章で見たアルバムが生み出された背景を時系列に概観し、観光がワーズワスをいかに宣伝し、彼の人気の高まりが湖水地

方観光にいかなる影響を与えたかを検証した。第 2 章「ピクチャレスクから文学観光へガイドのなかのワーズワス(1850 年まで)」はワーズワス存命中、すなわちピクチャレスク旅行から文学旅行への移行期を扱い、詩人が 1813 年から 1850 年まで暮らしたライダル・マウントが次第に観光化されていく様子、ガイドブックが次々とワーズワスからの引用を増やし、その読者層を拡大していった様子を辿っている。詩人自身が書いた『湖水案内』(1810-1835)は、絵画的な美の枠組みよりも文学作品を通して風景を楽しむ新しい旅行形態の確立に寄与したが、その影響力は様々なガイドブックや旅行記という媒体を通して発揮されたことを明らかにした。ワーズワスが異を唱えた鉄道の導入は、実は大勢の文学旅行者とりわけワーズワス愛好者を運んできて、『逍遙』(1814)、『ダドン・ソネット』(1820)などの作品に描かれた場所への旅行を促したことも明らかにしている。

第 3 章「ワーズワス観光 ガイドのなかのワーズワス(1850 年以降)」では、19 世紀後半、「ワーズワス巡礼」が大衆旅行に組み込まれて変容していく一方、ワーズワス愛読者をターゲットとした特別なガイド類が生まれ、様々なゆかりの場所が発見・聖別化されて「ワーズワス・カントリー」というものが創出されていく様子を辿った。グラスミアにある詩人の墓は直ちに巡礼地となり、ライダル・マウント以外の詩人の家も次々と観光スポットになっていった。批評界ではワーズワスの名声は死後 15 年ほど落ち込んでいたと言われるが、湖水地方文化においては彼の存在は大きな影響力を維持していた。ワーズワスの作品・自然観がガイドブックを通してより広範の読者に届き、湖水地方の声として人々の意識に埋め込まれていった様子を検証し、旅行者＝読者の間で人気維持されたことが、1870 年代の批評界におけるワーズワス再評価にも繋がったことを指摘した。

第二部(詩人の家 - 湖水地方における 4 つの家)では、ワーズワスの 4 つの家が異なる経緯を辿って観光地化されていく様子を辿り、その違いがワーズワス受容のあり方の違いを反映していることを明らかにした。まず第 4 章「ライダル・マウントとダヴ・コテージ 詩人の庭」では、19 世紀の大部分を通してライダル・マウントの人気がいかに高かったか、そしてダヴ・コテージがいかにしてその地位を奪っていったかを辿った。注目したのはワーズワスが作った庭である。旅行者たちは詩人自身に庭を案内してもらうことを楽しみにし、詩人の死後は、彼が詩作・散策を行った庭を自らも歩くことで亡き詩人との繋がりを感じようとした。ライダル・マウントが 1860 年代半ばにその門を閉ざすと、旅行者たちは次第にグラスミアのダヴ・コテージの庭にその代替物を見出すようになっていく。これは、マシュー・アーノルドが賞揚した、いわゆる「黄金の 10 年間(1798-1808)」に書かれた作品に対する評価の高まりとも関連しているだろう。ヴィクトリア朝後期になると、人々の関心は「老齢の桂冠詩人」から「若き日の詩人」へと移っていったのだ。ダヴ・コテージが最も重要な「詩人の家」としての地位を確立し、1891 年博物館として一般公開されていく経緯も検証した。

第 5 章「コッカマスとホークスヘッド 詩人の子供時代」では、ワーズワスが子供時代を過ごした場所がいかにして文学旅行者に見出されていったのかを探った。『序曲』(1850)

の人气が遅ればせながらも徐々に高まっていくと、ワーズワスが子供時代を過ごした場所への関心も出てきたが、文学者、旅行者、地元住民の間では温度差があった。生誕地コッカマスでは、文学者主導で、教会の記念窓、記念泉水盤、黄水仙祭りなどの行事を通して詩人の存在が公的に祝われ、その生家も、ダヴ・コテージと同様寄付金集めによって買い取られ、博物館として公開された。他方ホークスヘッドにおいては、詩人が学校時代に暮らした下宿屋が旅行者を惹きつけたが、専門家からは疑念がさし挟まれ、その家が公的に記念されることはなかった。一方愛好家たちは、ライダル・マウン트의庭を散策したようにホークスヘッド周囲の野山を散策し、湖や岩山、小川や木々などに詩人の面影を求め、同じ空間を共有することを求めた。こうした違いはワーズワス受容における二つの側面研究され、評価され、公的に記念されるという面と、一般読者に愛読され、時に商業化されながら文化的風景のなかに刻み込まれていくという面とを反映しているだろう。

第三部（ワーズワスの大衆への受容）では、ワーズワスの一般読者への受容のあり方についてさらに詳しく取り上げている。すなわち、詩人を記念する様々な形について考察し、彼が湖水地方の文化的風景に埋め込まれ、アイコン的存在となっていく様子を検証した。第6章「回想のワーズワス」では、地元住民と旅行者たちの間で流布していたワーズワスに纏わる思い出・噂を扱った。詩人とじかに会って話をした訪問者たちは、ライダル・マウン트의庭から何らかの植物を記念物として持ち帰ることを常とした。詩人の死後も「敬虔なる」植物泥棒はあとを絶たず、「詩人の月桂樹」伝説まで創られる。他方、地元住民の記憶に残る詩人像は、風景のなかに詩人の面影を辿ることを願うワーズワス旅行者たちの希望と反応して、湖畔の岩や黄水仙、灯心草祭を詩人の記念碑として聖別化していった。ワーズワスを巡る個人的な様々な思い出が、空想・願望を織り交ぜて作り替えられ、湖水地方の文化的記憶となっていく様子を検証した。

第7章「描かれたワーズワス・カントリー」では、ワーズワスゆかりの風景や事物が、挿絵入りのガイドや詩選集、風景画集などにどう表象されて宣伝されたかを探った。視覚情報を多く含んだこれらの大衆受けする媒体は、一方ではワーズワスの詩を通して湖水地方を眺める審美眼を養い、他方では風景の理解を通してワーズワス作品を觀賞する態度を涵養した。また環境の急速な変化のなかで、これらの挿絵入りの本は記念碑的な場所を本のなかのみならず現実にも保存することを促した。ワーズワスが自ら書いたガイドのなかで提唱した、湖水地方は一種の国民的財産であるという考え方は、1895年創設のナショナル・トラストとの理念を支えたと言われるが、こうした考え方は、文学観光を通して少しずつ涵養されていったと言えるだろう。

エピローグ「湖畔にて 日本から来たワーズワス巡礼者の目を通して」では、20世紀初頭にはるばる日本からワーズワス巡礼にやってきた高木市之助の『湖畔 ワーズワスの詩蹟を訪ねて』（1950）の検討を通して、ワーズワス観光の19世紀を振り返った。言葉や文化の壁を越えて訴えてくるワーズワスの詩の力、湖水地方の風景の力について考察し、21世紀を展望して結びとした。